

第2 教育研究団体の意見・評価

○ 全国歴史教育研究協議会

（代表者 池 口 康 夫 会員数 約 16,200 名）

T E L 03-3393-1331

1 はじめに

今年度の大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）の分析を終えて、問題のレベルからすれば、日常の授業をほぼ反映できる内容になっていることは、ここ数年来の傾向として有り難く受け止めている。ただし、解答するに当たって、ほとんどの設問が、設問の文だけを読み、世界史の知識・理解のみで対処できるようになっている点が残念でならない。全国には、センター試験のテーマに即して授業展開を改善したり、そのリード文を参考に授業内容の再構成や考查問題の作成をする教師も多いであろう。本協議会員の中にそのような教師が複数存在する。しかし、その一方で、解答に当たっては生徒に「リード文は読むな、時間の無駄だから」という指示を与えている教師もいる。作問に当たる方々がせっかく丹誠込めて意欲的にテーマ設定や、リード文作成をしてくださっているのだから、設問も一貫してそのテーマにそうとか、リード文を熟読する中で解答の鍵^{かぎ}が引き出されるとか、リード文の全文を読まなければ解答できないなどの仕掛けを用意していただくことを毎年願い続けているのだが。

また歴史的思考力とは何かを考えたとき、歴史的事象を時間軸や空間軸を移動させて検討したり、複数の事象間の関連や因果関係を考察したりすること、歴史的事象についての様々な解釈を比較してどちらにより客観性や妥当性があるかを考えたりすることなどをあげることができよう。そうした歴史的思考力を発揮して解答する問題の作成をも更に御検討いただければ有り難い。

以下、今回のセンター試験「世界史A」と「世界史B」の試験問題について、限られた紙面の中ではあるが、御検討の一助となることを願って、本協議会としての意見と評価を記す。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等

(1) 「世界史A」について

昨年度同様、「世界史B」との共通問題はなく、大問3題、小問33問であった。

時代的には選択肢から判断するに前近代が10問、前近代と近代にかかわるものが2問、近代が3問、近代と現代にかかわるものが5問、現代（高等学校学習指導要領「(3)現代の世界と日本」に該当する部分）が13問（うち戦後史が6問）であった。昨年より現代史の比重が低くなったが、戦後史は微増し、「近現代史を中心とする」高等学校学習指導要領の目標に合致した出題であると考えられる。政治史の知識・理解を問う設問が25問と大きな割合を占め、文化史が5問、その他に、文化・政治の混合が2問、文化・経済・政治の混合が1問であった。地域配分は、非ヨーロッパ世界は15問、欧米関係が15問、混合が3問である。昨年と比較すると、非ヨーロッパ世界が増加し、選択肢はイスラーム世界、南アジア、東アジア、東南アジアと満遍なく出題されている。

正しい文を選ぶ問題が13問、誤った文を選ぶ問題が5問、波線部の正しいものを選ぶ問題が1問、リード文中や問いで新たに掲げられた文の空欄に適語を補充する設問が4問あり、二つの文の正誤の組合せが6問、年表中の位置を選択する問題が1問、語句選択が1問、年代整序が2問であった。昨年見られなかった6択問題は2問出題された。誤った文を選ぶ問題や二つの文の正誤の組合せ問題が増加した。

写真が3点と昨年より増加し、史料が1点使用された。また、グラフなどの統計資料は用いられていなかった。

第1問 「モニュメントや歴史的建造物について」

Aは、パルテノン神殿がテーマである。問1は、古代ローマを代表する建造物を選択する設問。ピサ大聖堂やポタラ宮殿は、高等学校学習指導要領の内容の取扱い(2)のAの部分の解説にある「思い切った集約化、焦点化が必要」に合致していない詳細な事項と考えられる。したがって、ほとんどの教科書には掲載されていない。そのような用語を誤答とは言え選択肢にするのはいかがなものか。問題文に「アーチを多用した建物はローマ時代の劇場である」と書かれているのだから、その点に注目させて、写真を選択する問題にした方がよかったのではないか。問2のaで「パルテノン神殿の建つ丘が、アクロポリスと呼ばれている」ことを判定させるのは、高等学校学習指導要領に合致しているのだろうか。また、アクロポリスとは「高い城」の意味で、アテネのアクロポリスは特に有名なだけである。選択肢自体、適切ではないように思う。問3はオスマン帝国の歴史をを大づかみしていれば解答可能な設問であり、適切な出題である。問4はギリシアの通史についての設問で、選択肢が世紀ごとになっており、教科書の地図を活用して学習していれば、解答可能である。

Bは、ベルリンのドイツ国会議事堂がテーマである。問5は、ドイツ帝国の政治についての設問で、標準的な問題である。問6は、1920年代に起こった出来事についての設問で、ドイツの戦間期の出来事の因果関係を把握しているかを問う良問である。問7は、ヒトラーとその所属政党についての設問で、標準的な問題である。問8は、ベルリンの壁の建設と崩壊の間の時期に起こった出来事についての設問で、日本に関する選択肢が入っており、高等学校学習指導要領(3)「現代の世界と日本」の本文、「世界の動向と日本とのかかわりに着目させる」にそった出題で、良問である。

Cは、大型モニュメントがテーマである。問9は、第一次世界大戦中の外交についての設問で、標準的な問題である。問10は、1930年代に起こった出来事についての設問で、選択肢は適切に散らばっており、良問である。問11は、第二次世界大戦後のアジア・アフリカの国々の成立過程や経験についての設問であり、標準的な問題である。

また、問5～7とリード文がドイツに関連しているためであろうが、すべてドイツに関する出題である。出題の偏りを少なくする工夫をなるべくしていただきたい。

第2問 「世界史の様々な局面で生じた人々の移動や離散」

Aはアフリカ大陸より送り込まれた黒人奴隷がテーマである。問1は、16世紀から18世紀に起こった出来事についての設問。選択肢がよく練られた、良問である。問2は、アフリカ大陸で起きた出来事について述べた三つの文の年代整序。歴史事象を大づかみさせる良問である。問3は南北戦争前のアメリカ合衆国における奴隷制についての設問で、因果関係を把握してい

るかを確かめる良問である。問4は、差別や人権をめぐる動きについての設問で、標準的な問題である。

Bは華僑がテーマである。問5は、清朝の時代に起こった出来事についての設問で、標準的な問題。問6は、中国同盟会に代表される革命派の人々についての設問で、④も正答ではないかとの見解もあったが、通常の指導では、清朝と交渉したのは袁世凱と教えるであろう。問7は、中華民国についての設問で、標準的な問題。問8は、シンガポールに関する文章中の空欄に語句を補充する設問。アの日本については解答可能であろうが、イのマレーシアからの独立は記載されている教科書が少なく、受験者は戸惑ったかもしれない。

Cはロシアに関する移民がテーマである。問9はユダヤ人をめぐる出来事についての設問であるが、ドレフュス事件、シオニズム運動とも掲載されている教科書が少ない上、二つの文の正誤の組合せなので、やや難問かと思われる。問10は20世紀前半の出来事についての設問で、標準的な問題。問11はソヴィエト連邦崩壊後に起こった出来事についての設問であるが、戦後のソヴィエト連邦について大づかみに学習していれば解答できる、良問である。

第3問 「歴史における伝統と変革」

Aはムスリム社会の伝統と変革がテーマである。問1はイスラームについての設問で、高等学校学習指導要領(1)「諸地域世界と交流圏 ウ イスラーム世界」にそった適切な問題であるが、④は「礼拝所」が「モスク」であることという単に言葉の意味を問うているだけである点が、惜しまれる。問2はイスラーム世界の文化についての設問で、問1とともに高等学校学習指導要領にそった意欲的な問題であるが、①のアラベスク、②のミニアチュール、③の『千夜一夜物語』、④のギリシア語文献の翻訳ともにそろって掲載されている教科書は見当たらず、難問であったと思われる。これは二つの文の正誤の組合せを問うべきではなかったか。問3はイスラーム世界の改革運動や政治運動についての設問で、高等学校学習指導要領「(2)一体化する世界 エ アジア諸国の変貌と日本」にそった内容で、良問である。問4は、イスラーム世界にかかわる出来事についての現代史に係る設問である。bについてはアメリカ合衆国の同時多発テロと21世紀の歴史事象も問われており、意欲的な出題であるが、受験者はここまで学習が及ばなかったかもしれない。

Bはインドにおける伝統と変革がテーマである。問5はインド土着の文化と13世紀以降インドに広まった文化に関する空欄を補充する設問である。高等学校学習指導要領「(1)諸地域世界と交流圏 イ 南アジア世界」にそった出題であり、インド社会の特質を把握しているかを測る良問である。問6は、ヨーロッパ人のアジアでの活動についての三つの文の年代整序の設問で、前近代から近代にかけての歴史事象を概観する良問である。問7は南アジアの宗教についての設問で、これも高等学校学習指導要領(1)のイにそった出題で、「世界史A」の学習範囲を踏まえた良問である。問8はインド・パキスタンの歴史についての設問で、標準的な問題である。

Cはクーデンホーヴェ＝カレルギの『パン＝ヨーロッパ』の抜粋を示し、ヨーロッパの主権国家体制の伝統に対する変革をテーマとしている。問9は、1923年より前に起こった出来事についての設問で、選択肢は文化史的・社会史的なものが含まれる。①～③は文の内容には誤りがなく、1923年以前かどうかかが判定の根拠となるが、④の文は内容に誤りがあるので誤答と

なる。時期を問う設問では、できるだけ文の内容には誤りを含めず、純粋に時期のみが判定基準となるような出題が望ましい。問10はヨーロッパ共同体（EC）が発足した時期の年表上の位置を問う設問で、標準的な問題である。問11はヨーロッパの主権国家体制にかかわる文章中の空欄を補充する設問で、高等学校学習指導要領(2)のイ「アジアの諸帝国とヨーロッパの主権国家体制」にそった良問である。

最後に全体を通して。昨年のように、動詞で正誤を判定させる選択肢はほとんど見られなかったが、誤文選択と二つの文の正誤の組合せが増加した。いずれも作問がしやすくなるが、受験者の力を測るには四つの選択肢による正文選択が望ましいであろう。また、今年も、高等学校学習指導要領の「(3)現代の世界と日本」に該当する内容の出題が多く、高等学校学習指導要領を踏まえた標準的な出題が多い。ただし、教科書本文にほとんど掲載されていない事項が正答となることはやはり避けていただきたい。

また、「世界史A」の特色の一つと言える、(3)ア「急変する人類社会」に関係するような、社会的・経済史的な出題が少なかったのも惜まれる。高等学校学習指導要領の内容の取扱いの(2)のウのイに「政治、経済、社会、文化、生活など様々な観点から歴史的事象を取り上げ」とあるように、多角的な出題が望まれる。最後に、例年のごとく、リード文を読まずとも解答可能な出題が大半を占めている。ぜひ、改善をお願いしたい。

(2) 「世界史B」について

今年度も、大問が4問、現行の高等学校学習指導要領を反映して大問ごとにテーマ設定がなされている。各大問は小問が9、配点25点で、計36問100点で構成され、ここ数年間の出題傾向を踏襲した出題であった。

出題を時代別に見ると、選択肢から判断するに、古代にかかわるものが4問、古代・中世にかかわるものが6問、中世にかかわるものが8問、中世・近世にかかわるものが3問、近世にかかわるものが3問、中世・近代にかかわるものが1問、近代にかかわるものが1問、近現代にかかわるものが3問、現代にかかわるものが2問、三つ以上の時代にかかわるものが5問であった。また、地域別に見ると、東アジアにかかわるものが8問、東南アジアにかかわるものが1問、南アジアにかかわるものが1問、西アジアにかかわるものが1問、内陸アジアにかかわるものが1問、ヨーロッパにかかわるものが8問、北アメリカにかかわるものが1問、南アメリカにかかわるものが1問、アフリカにかかわるものが1問、オセアニアにかかわるものが1問、アジア全域にかかわるものが2問、西アジア・ヨーロッパにかかわるものが2問、アジア・アフリカにかかわるものが2問、三つ以上の地域にかかわるものが6問であった。出題形式については、文章の正誤文を選ぶものが26問、写真を用いて正誤の判断の組合せを問うものが2問、文章の正誤の判断の組合せを問うものが4問、穴埋め語句の組合せを問うものが2問、地図と王朝名の組合せを問うものが1問、地図と文章の組合せを問うものが1問であった。その一方で、出来事の時代順を問う問題はなくなった。

例年どおり、東南アジア、内陸アジア、アフリカ、ラテンアメリカなどからも出題されたが、昨年度に比してその割合は減った。その一方で東アジア・ヨーロッパ・アメリカに関する問題が増えたことで、昨年度に比して平均点が上昇したと思われる。

第1問 「生業と労働の歴史」

Aでは、唐・宋・明代の中国について出題されている。問1は、唐・宋の科挙合格者に関する問題。正解の王安石はすべての教科書に記載されており基本的な出題。問2は、明代の出来事を問う基本的な出題。問3は明代の産業に関する穴埋め語句の組合せを問う標準的な問題。

Bでは、中世ヨーロッパについて出題されている。問4は、中世の農村・都市に関する基本的な問題。問5は、15世紀後半から16世紀後半の出来事を問う問題。内容は基本的だが、同時代史的視点が要求される。問6は兵制に関する問題。これも基本的な内容だが、全時代・地域にまたがる正確な知識が必要とされる。

Cでは、18世紀から20世紀の欧米の産業・労働問題について出題されている。問7は、イギリスの商業・製造業に関する基本的な問題。問8はアメリカの産業・経済に関する基本的な問題。問9は労働問題に関する問題で、標準的な内容。

いずれの問題も正確な知識が要求される。

第2問 「学校・教育に関する歴史」

Aでは、ヨーロッパ中世の学問に関連して出題されている。問1は、アカデメイアとマドラサに関する問題。マドラサを掲載している教科書は6ではあるが、イスラーム社会における重要性を考えれば妥当な問題であろう。穴埋めの内容は基本的。問2はユスティニアヌス1世に関する基本的な問題。問3は12世紀の出来事を選ぶ問題。これも内容は標準的だが、同時代史的視点が要求される。

Bでは、中国の教育に関連して古代から現代について出題されている。問4は、中国と朝鮮の官吏登用制度に関する問題。内容は基本的。問5は、中国におけるキリスト教布教や宣教師の活動に関する標準的な出題。かなり精緻な知識が要求される。問6は、周恩来に関する二つの文章の正誤判断の組合せを問う問題。

Cでは、歴史教育に関連してヨーロッパ・イスラーム世界について出題されている。問7は、イギリスの教育法と、アズハル学院に二つの文章の正誤判断を問う問題。問1のマドラサもだが、イスラームの社会については、教育現場できちんと教えるべきものである。アズハル学院を掲載している教科書は5ではあるが、現存最古の大学であることの歴史的意義を考えれば、出題は妥当と考える。問8は、北欧諸国に関する問題。基本的な内容だが、受験者にはなじみが少ないかと思われる。問9は、地図に示された旧ユーゴスラヴィアとルーマニアに関する二つの文章の正誤判断を問う問題。地図で両国の位置を判断することを苦手とする受験者は多いだろう。中学校社会科地理分野で世界地理全域は扱われず、高等学校地理歴史科で地理を選択しない生徒がいる現状において、空間的把握をいかにして生徒に身に付けさせるかは、必修である世界史の教員にとっては切実な課題である。

テーマは学校・教育に関する歴史だが、内容・時代は多岐に渡り、地理的なことも含めて幅広く正確な知識が要求されている。

第3問 「信仰や宗教に関する歴史」

Aでは、太陽や月に対する信仰に関連して、前近代のアジア・古代エジプトについて出題されている。問1は、古代・中世の宗教に関する基本的な問題。問2は、高句麗に関する基本的な問題。問3は、劉邦と耶律大石に関する二つの文章の正誤判断を問う問題。

Bでは、東南アジアの文化の重層性に関連して、東南アジア・イスラーム世界・オセアニアについて出題されている。問4は、ドンソン文化の銅鼓とアンコール=ワットの写真に関する二つの文章の正誤判断を問う問題。二つの写真とも教科書・副教材等に掲載されているもので妥当ではあるが、写真がやや不鮮明であり不親切。また、東南アジアの宗教は時代により変化するので、例えばイの文を「bの遺跡は、当初から大乘仏教寺院として建造されたものである。」などとすれば、より親切であろう。東南アジア史は、ややもすると授業では軽く扱わざるを得ないことが多い。現場の教員としては反省すべき点である。問5は、中世イスラーム世界全般に関する問題。問6は、オセアニア地域に関する問題。いずれも基本的な問題だが、受験者にとっては苦手とする分野であろう。

Cでは、キリスト教に関連して古代・中世のヨーロッパ・イスラーム世界・エジプトについて出題されている。問7は、諸宗教の死後の世界観や墓地に関する問題。④の「死の舞踏」については教科書には記述がほとんどなく、正解ではないものの出題したことの適正さには疑念を抱く。問8は、8世紀の出来事を選ぶ問題。これも内容は標準的だが、同時代史的視点が要求される。問9は、修道院に関する二つの文章の正誤判断を問う問題。

個々の問題・選択肢は基本的だが、解答には正確な知識が要求されている。

第4問 「人の移動と移住に関する歴史」

Aでは、ラテンアメリカについて出題されている。問1は、アメリカ大陸の古代文明に関する問題。内容は基本的だが、これも授業では軽く扱わざるを得ないことが多い。現場の反省が促される。問2は、中世・近世のイベリア半島に関する基本的な問題。問3は、15世紀から20世紀のアフリカに関する基本的な問題。判断すべき語句に破線がついていて親切である。

Bでは、インドについて出題されている。問1は、甲骨文字・オストラコン・インダス文字の写真に関する二つの文章の正誤判断を問う問題。三つの写真とも教科書・副教材等に掲載されているもので妥当。問5は、古代からムガル帝国に関する基本的な問題。問6は、イギリスの旧植民地に関する基本的な問題で、視点が面白い。

Cでは、中央ユーラシアに関連して人の移動と移住について出題されている。問7は、人の移動と移住に関連する、北アメリカ・ノルマン人・後ウマイヤ朝・レコンキスタについての問題。問8は、遊牧世界と農耕世界のかかわりについての出題。近年の学界の傾向を踏まえ、今後重視すべき内容である。問9は、フン人とセルジューク朝の移動経路を示した地図と王朝名の組合せを問う問題。受験者は4世紀と11世紀の歴史地図を思い描く必要があり、空間的把握を要求される問題である。

例年指摘していることだが、入試問題に求められているのは、落とすための問題ではなく、受験者が高等学校における学習活動や成果が評価されるような問題を出題することである。この観点で判断すると、今年度のセンター試験も、良質な問題が出題されていることが評価できる。同時代史的な視点、空間的把握を要する視点を持った問題が出題されることも、受験者に対してこのような視点を喚起し好ましい。過去において、写真が用いられていても問題に何ら関係しない例が多々見られたが、今年度は、写真を用いた2問とも写真そのものが問題の対象となっており好ましい。次年度以降もこのような出題をお願いしたい。出題の形式・内容について、全体的に奇をてらうことなく受験者に対して親切な問題であることを評価したい。

今年度の「世界史B」の平均は62.70点で昨年に比べ3.72点上昇した。これは、昨年度に比べ、出題された地域の配分が、高等学校の教育現場の実態に近づいたことが一因と思われる。昨年度も指摘したように、限られた時間のなかで、高等学校「世界史B」の授業の中心が中国・インド・イスラーム世界・ヨーロッパ・アメリカにならざるを得ないのが現状である。もちろん、これは世界史教育に携わる者として反省すべきことであり、いわゆる「周辺地域」を軽視するつもりはないが、今後も高等学校学習指導要領や教科書の記述量に比例した問題の配分をお願いしたい。今年度の「世界史B」の受験者は94,106人で昨年度より178人の増加にとどまった。19年度から20年度の増加が2,309人であったことを考えると、昨年度の平均点の大幅な低下が影響したものと考えられる。「世界史B」に限らず、平均点の変動は受験者にとっては死活問題である。また、センター試験は「入試問題のスタンダード」という意味合いを持つ。例年、センター試験の問題文や選択肢で扱われた内容が、次年度以降の私立大学や国公立の2次試験で出題される傾向がある。その意味においても、出題内容の適正な配分、適正な難易度の出題に今後も留意していただきたい。

3 ま と め

今年のセンター試験でも、我々の日常の教育活動に取り入れたいテーマが取り上げられていることは、率直に評価したい。

しかしながら、やはり例年と同様、知識・理解を問う無難な設問が多い。問題の作成に当たって、極めて多種多様の制約がある中で、意欲的に新たな問題分野を開拓することが困難な状況であるということは推察した上で、あえて苦言も呈した。それは、このセンター試験が全国の高校生にとっては世界史学習上の極めて重要な一つの基準になっており、私たち高等学校世界史教師にとっても、授業の内容・方法等を考える上で、やはり重要な参考資料として受け止めているからこそである。本センター試験が、さらに私たちの教育活動の指針ともなることを願ってやまない。

センター試験のより一層の充実を期待して、本協議会の提言としたい。